

ラグビー部

得丸 幸夫, 柴田 涼平

千葉大学医学部ラグビー部の創部時代

(1) 創部のきっかけ

私が千葉大学医学部に入学した1972年（昭和47年）には、医学部にラグビー部はありませんでした。そこで西千葉の全学のラグビー部に入部しました。先輩に聞くと、2年先輩にも医学部の学生（現肺外科・由佐俊和先生）がいるが、学部授業が始まると亥鼻キャンパスに行ってしまうため練習に参加できなくなるという話でした。

当時、同級生の間ではスポーツをやりたい人たちが多く、一時廃部されていたバトミントン部やヨット部などを再開したりしていました。そこで、友人たちに声をかけるとラグビーもやってみようということになり、1年生の秋頃から西千葉キャンパスで少しずつ練習を開始しました。ボールを2つ購入し、私しかラグビーを知っている人はいなかったのが、私が指導して5～6人でのボール遊びが始まりました。

せっかくだからラグビー部を創ろうということになりました。同級の小沢卓夫君の父上が皮膚科の故岡本昭二教授と同級ということで部長をお願いしたところ、快く引き受けて下さいました。サッカー部のキャプテンにグラウンドの共同使用を無理にお願いし、我々の同級生の女子にマネージャーを頼んで部の申請をしました。「すぐつぶれそうだから、まず同好会でやれば」とか「人数を15人集めると、他の部の部員がその分減ることになるので困る」と反対の声も多かったのですが、同級生たちの応援もあって何とか認められ、どうせ続かないだろうという声を背に受けながら活動を開始しました。

(2) いきなりの公式戦

ちょうどラグビー部ができた時期に、たまたま運動部に特別な補助金が出ることになったらしく、部長の岡本教授から勧められてラグビーポール（ゴールポスト）の設置を申請したところすぐ承認され、あっという間に医学部グラウンドにポールが立ってしまいました（写真1）。これでは簡単にやめるわけにはいかないと、他の運動部に所属している同級生もかき集めて練習をしました。

無理にお願いし、マネージャー役を引き受けてくれた片桐洋子さん（彼女はテニス部で、ラグビー部のマネージャーとしては名簿に載っていませんが）も練習の度にジュースや手作りの食べ物を差し入れてくれました。練習ばかりでは励みにならないと、2年の秋に医歯薬リーグに参加する手続きを取ったところ、練習試合もしないうちに試合の日が来てしまいました。おまけに前日に大雨が降り、「明日は雨だから試合はないだろう。」と安心して朝まで酒盛をした者が何人かいて集合時間に集まらず、酔いも醒めない連中をたたき起こして連れていきました。相手は東邦医大でしたが、スクラムの中は酒臭く、グラウンドの外に出て吐いている者もいて、びっくりしたと思います。何点入れられたか忘れましたが、我々はワンチャンスをものにして記念の1トライを挙げました。本来野球部の岩井潤君が蹴ったボールを私が追いかけて、拾い上げてトライしました。このトライは今でも語り草で、試合は負けたのにみんなで乾杯しました。ラグビー部がいまでも続いているのは、このトライがあった賜物と思っています。



写真1:創部当時の部員、医学部新病院建設中である。

(3) 関東医歯薬リーグ戦

初期のラグビー部が戦ってきた相手チームにはいろいろな思い出があります。東京歯科大学と埼玉医科大学の2校は、特に記憶に残っています。

東京歯科大学は、我々が医歯薬リーグに参加した当時一部の強豪校でしたが、千葉にグラウンドがあったこともあり、初参加の千葉大学医学部に目をかけていただきました。特に額賀康之先生（当時OBだったと思います）は、合同練習に誘って

下さり、初心者の多い我々に練習方法や試合のやり方などを細かく教えて下さいました。

埼玉医科大学は、我々より2年早く医歯薬リーグに参加していましたが、私の地元の大学であり、当時われわれと同じ四部でしたが、日本のラグビーの有力大学出身のコーチの指導のもと、グングン強くなっていった思い出があります。現川越市総合保健センターのセンター長である唄（そわ）康二先生は、同学年であり、医師会の会合でお会いするたびに昔話をしています。

平成15年8月に発行された「関東医歯薬大学ラグビーフットボール連盟 50周年記念誌」が手元にありましたので、この三校の戦績を調べてみました。

千葉大学医学部の初参加は、昭和50年度からになっていましたが、驚いたことに、前項に述べた初戦の東邦医大戦の記録はありませんでした。昭和50年度の千葉大の成績は、四部4位で、我々の



写真2: 昭和50年10月26日初勝利後の部員と応援団

順位	四部	東邦	埼玉	聖マ	千葉	帝京	勝敗
1	東邦		○ 14-8	○ 40-0	○ 4-0	○ 30-0	4-0
2	埼玉	● 8-14		○ 14-4	○ 26-0	○ 94-4	3-1
3	聖マ	● 0-40	● 4-14		○ 18-14	○ 30-0	2-2
4	千葉	● 0-4	● 0-26	● 14-18		○ 52-4	1-3
5	帝京	● 0-30	● 4-94	● 0-30	● 4-52		0-4

図1: 昭和50年度成績

順位	一部	自治	群馬	千葉	順天	防衛	東医歯	勝敗
1	自治		○ 20-6	○ 30-4	○ 28-7	○ 49-3	○ 48-0	5-0
2	群馬	● 6-20		○ 46-12	○ 15-9	○ 13-10	○ 16-4	4-1
3	千葉	● 4-30	● 12-46		○ 15-11	△ 3-3	○ 22-0	2-2-1
4	順天	● 7-28	● 9-15	● 11-15		○ 20-4	○ 20-0	2-3
5	防衛	● 3-49	● 10-13	△ 3-3	● 4-20		○ 17-4	1-3-1
6	東医歯	● 0-48	● 4-16	● 0-22	● 0-20	● 4-17		0-5

図2: 平成2年度成績

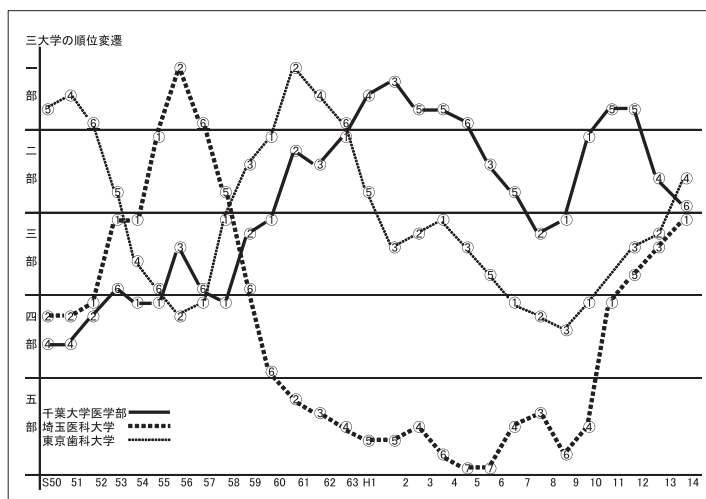


図3: 三大学の28年間の推移

公式戦初勝利である帝京大学戦（写真2，図1）の記録でした。私の記憶では上述の東邦医大戦は前年の試合であり、翌年から正式に登録されたのだと思います。

昭和50年から平成14年までの三校の戦績を見ると、夫々のチームに様々な波があることがわかります。

我が千葉大は、じわじわと実力をつけ、14年目の平成になって一部に昇格し平成2年には3位という輝かしい成績を上げました（図2）。創部当時のことを思うと隔世の感があります。

東京歯科大学は、10年以上の経過で大きな波があり、一部と四部の間を上下しています。

埼玉医科大学は、急速に実力をつけて一部に昇格した後に、長い低迷期が続きました。いずれの戦績を見ても、チーム力を長く維持することがいかに困難であるかがわかります。

平成14年には、千葉大は低下傾向、東京歯科大学、埼玉医科大学は上昇傾向を示し、共に二部あたりにいました（図3）。

最近の千葉大学医学部ラグビー部の経過については、他の筆者に譲りますが、ラグビー部がいまだに活動していて、年度末のOB会で現役部員と交流できることは無上の喜びを感じます。今後のさらなる活躍を期待しています。

（とくまる ゆきお）

千葉大学医学部ラグビー部の現在

千葉大学医学部が135周年という輝かしい記念の年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。僭越ながら私の過ごした2002年から2007年の6年間のことを書かせていただき、ラグビー部の現在

第5章 交友の広がり

の状況を紹介したいと思います。

私が入部した2002年。ラグビー部が1年間をかけて準備をしていく一番大切な大会である関東医歯薬リーグを人数不足により棄権し、二部から三部に降格しました。あれだけ厳しかった当時の公平誠キャプテン率いる幹部が流した涙は今でも覚えています。

次の年の2003年からは新勧に今まで以上に力を注ぎました。あの年の幹部のためにも二度と棄権はしたくない、という強い思いのもと部員全員が心を込めて気迫で勧誘し、2004年に12人のプレーヤーと1人のマネージャーが入部したことを皮切りに部員は増え続けました。

また2003年から坂本宏文コーチが指導を始めて下さることになり、戦術や練習方法は言うまでもありませんが、本物のラグビーの哲学が医歯薬リーグを超えたラグビーの精神が部活に定着しました。周りの環境や人を当然のことと思わず感謝の念を忘れない、控えの選手やマネージャーを大切にする、ラグビーを通じて人間形成をする、などといったコーチの言葉は今となっては全部員の心に刻み込まれていることでしょう。

そして若いチームは徐々に力をつけ、私の代が幹部の2006年、東医体で史上最高位の3位となり二部復帰を果たすことができました。いつの間にかブレ

イヤー27人、マネージャー10人と大所帯の部活になっており、「人」の力の強さと大切さを実感しました。

そして私たちの学年が引退した2007年の関東医歯薬リーグ。入れ替え戦で東京医科歯科大を破り、7年ぶりにリーグ戦一部に昇格することができました。入れ替え戦には今までの歴代のOB、OGが駆けつけて下さり、苦しい時代を支えて下さり、自分たちを育てて下さった諸先輩方によく恩返しができた、という気持ちでいっぱいでした。

私たちが引退した後もラグビー部の躍進は続き、2008年に東医体優勝、関東医歯薬リーグ一部3位という輝かしい成績を納めています。

繰り返すようですが、ラグビー部がここまで成長できたのは、「人」を大切にする、「人」に感謝するという当たり前でとても難しいことが、きちんと実行できているからだとは私は信じています。それを教えて下さった坂本コーチ、ラグビー部の礎を築いて下さったOB、OGの方々、今もひたむきに努力を重ねる現役部員に心からの感謝しています。

私は人生最後の学生生活において、人生で一番大切なものを掴んだような気がします。この部活の一員になれたことを幸せに思いますし、一生の誇りでもあります。

one for all all for one.

(しばた りょうへい)